

「自己」の解体と学校教育

原野利彦

Dissolved Self and School Education

Toshihiko HARANO

【1】問題意識

現代において我々は、ごく「自然に」経験を一貫して積み重ねていくことが困難になっている。環境との関係、また自分自身の心身と関係において非常に不安定になっている。いわば「自己」の解体ともいえる状況におかれている。つまり、「生きている」ということへの関わりが不明確になっている。self-reliance (自分だけを頼る) という意味あいをも持っている「自己」という概念が矛盾をもたらしているのである。社会の多様性と活動分野を細分化するだけではなく、それぞれの布置を原子化する拠点として構想された「自己」が、自らの成立根拠を揺るがせられているのである。ここにおける学校教育とは何か。

【2】近代的意識の特徴

近代的意識の特徴とは、①近代では科学が至高の位置を占めている。その科学的知識を可能にするために、存在から質的差異を奪い取り、等質化してしまい、どんな操作を加えようともかまわない価値しか持たない対象にしてしまったこと。②そしてそのことは、対象に向かい合う人間そのものにもはねかえり、人間も等質的な操作対象に化してしまったこと。③しかし、まるで異質の物を接ぎ木するように、個人が重視され、この個人の内面に存在から奪った諸価値を担わせ、価値を個人意識の領域だけに限定してしまったこと。

我々は「あれかこれか」の岐路に立たされた時、それを技術的問題として捉え、操作的・実験的に解決可能なものとして扱うことが求められている。しかし、岐路は必ずしも技術的に捉えきれぬわけではない。ここで人は分裂を余儀なくされる。しかも技術的に解決できない側面はマイナスの評価を受けるため、限られた選択行為の拒否、もしくは耐え難い選択肢の隠蔽の努力がなされるに至る。こうして我々は進退窮まって消耗していく危機の中を生きている。この「状況」は技術的文明によって強要される。たとえば「情報」の名において我々はこれらの危機に陥っているのである。

今や個人は、その空漠とした世界を前にして自らの成立根拠を問うことすらできなくなっている。強調点や優先順位を決める「主体」であるはずの「自己」が、「世界内存在」であることを経験できないという奇妙な立場に置かれているのである。「自己」を世界から乖離させることによって「主体」であることを宣言した途端、世界からの乖離を嘆くという「状況」は今日でも続いている。

「自己」が第一原理であるとし、物事の性質や自分が占めている場所とも無関係であるとする思考法は有効であると同時に不可解な「状況」をもたらしている。人間が自立し、その自立した人間が秩序をもたらすために、自らを存在から切り離し、すべての存在を「道具」と見做すということが、まさに個人主義を袋小路に追い込んでいるのである。だからこそ、全体主義や社会主義に突如として飛躍し、それに失敗し、また同様な試みが族生するという現象も起こる。このように現代の「情報」社会においては、個人の価値が根底から問い直される。この時、今まで暗黙裡に密輸入していた社会システムの惰性が破壊され始める。

【2】ヒエラルキーの喪失

西欧型近代は本来的には事実と価値とを統合している世界を、事実と価値とに分離し、価値付与の能力を「自己」なる「主体」に負わせた。我々の課題はこの社会において、どんな場合にどの程度時代精神としての技術的思考を忘却し、社会的・歴史的な制約をどの程度感じるかということにある。——これが現代に求められている「生命力」であろう。

具体的な生の多様な次元という厚みをそなえた宇宙、多様な次元がばらばらに乖離していない宇宙を取り戻すこと。これが現代人が求めているものである。例えば昨年来のニューヨークにおける天使ブームを見ても、ヒエラルキーのある宇宙を取り戻すこと、そして高みに上るための媒介となるシンボルを手に入れることを人々は求めていることが分る。

近代において、個人は世界に対して選択し、操作するための権能の一部を自分に譲るように強制してきた。そしてあたかも、世界に対して人間が選択の自由をもつかのように振舞ってきた。しかし、我々には本当に選択の自由はあるのだろうか。我々の選択の意志は、大地の意志であろうか？

我々の持つイメージーションや観念は、近代的伝統に縛られた社会的・歴史的意識の範囲内でのみ作用している。イメージーションや観念を、恒常性や一様性を持つものとしてのみ捉えているため、そのダイナミクスを見失っている。しかし、この一元的に固定された考えを離れ、イメージーションを空想や妄想、諸観念の作用、反作用の総体もしくは分節された部分であると捉え、それらの結合や分離は成り行き任せのものとして見るならば、近代的な社会的・歴史的な意識を越える地平が生じるだろう。また観念を、それが一般的な働きをする場合があるとしても、それが他のものとの関係で一般的な役割を果たしているだけであって、観念そのものの本性が一般的な働きをするということではないと見ることも、近代的な意識からの超越を可能にするだろう。

【3】「関係」概念は「アクセス容易」に変換されてしまった

宇宙からヒエラルキーを奪い、それを一群の平板な原子の集まりに分散し、それらを操作対象にした現代は、居間でテレビを見、書斎やオフィスでせっせと仕事をし、専門知識や教養を身につけ、大衆に迎合するという専門家の俗物の跋扈する世界になってしまった。我々は新たな遠近法を必要としている。近代的な《イメージーション》＝体験のコレクション

ン》を超え、新しいイマジネーション＝体験のコレクション》が求められているのである。物事を分節し、結合しようとするやり方が質的に異なった遠近法が必要なのだ。脱構築的な遠近法。ニーチェの言う偉大な「生命力」に接しようとする試みの回復は、近接、類似、因果性などの類縁関係が慣習的な遠近感を越えてしまう時に可能となるであろう。

近代的な連続的遠近法とは、すべての「出来事」をありふれたものに変換することである。「有能で役に立つ」研究者や評論家は「出来事」を切り縮める。それは「現代的課題に答える」という名目で、我々のサイズに縮減された社会的・歴史的文脈において「外」を措定するにすぎない。確かに、近代的遠近法においても分析的理性とイマジネーションとは相互に触発し合う。そして「主体」が信念や因果性によってこれらの所与を超出し得るかのように考えることも出来る。人間が生命を維持するために「自然」として課している恒常性（絆、接合原理、因果性）を「自明の理」として想定することも出来る。しかし、こと場合、超出（自由）も「現代風に考案された」「人間性」（人間的「自然」）に予め組み込まれている文脈にすぎない。なぜならば、分析的理性も現代社会に通用する「効果」によって定義されるものであり、或る「外」によって定義されるものではないからである。だから「人間性」という「基準」もまた、「現代風」の社会的・歴史的なものであり、それによって制約された「生命力」にすぎないのである。

我々は「位置づけ」とか「関係を明らかにする」という言葉を何か力あるものと思いついでいる。関係づけることは何か新しいものを生み出す力を備えているように思いついでいる。しかし、そもそも「関係」づけとは或る観念が他の観念を触発することにすぎない。つまり「現実」とか「文化」と名づけられているものも、現代社会に通用する或る効果を持つ接合形式の一つにすぎない。端的に言えば、「関係」とはアクセスが容易であるということだ。つまり、怠惰、懦弱なユーザーでもユニット家具で楽しめるように、我々はアクセス容易なものを辿って文脈を作り出して、それを関係づけと呼んでいるのだ。ステレオタイプの議論の場を学会と名づけることも自由である。それが習慣化すれば個性と呼び、多数が担う慣習となれば文化と名づける。

勿論、認識とは断言することであるが故に超出することである。自分が知っていること以上を断言し、観念を超出する判断を下すのである。だからこそ自分を「主体」として措定し得る。しかし、この意味での「断言する」生命力も単に「現代的」な社会的・歴史的との緊張関係で情念＝関心を見ることにとどまる論理を排除できるものではない。我々は「外」に出ようと試み「無意識」を措定したりしてきた。また、「道具主義」を現実理性として成立させたりしてきた。つまり、無意識のうちに働く「生」が社会や歴史を「道具」として利用するという構図を考案してきた。しかし、それは真に「外」に出るか否かの「基準」を提起し得るものではない。

【4】道具主義＝小市民的賢しさ

ここで制度化＝習慣化された「生」とそれを越えて力動化する「生」とをどう区別するかという問題が生じる。

現代において我々は「超越」にとって替わった「快樂原則」や「道具主義」のニヒリズムを呪物視している。確かにこのような方法で「外」に出るということは、一見すると単

に社会化されることとの緊張関係で情念＝関心を見る姿勢を拒否するという利点を持っているように見える。しかし、道具主義（つまり「自己」の無意識を大事にして、これを力の源泉にして、自分も含めて全てのものを「自己」のための道具とするという考え）は、実は制度的にがんじがらめにされた思考法にすぎない。それは無歴史性において彷徨せざるを得ない状況に我々を置く。なぜなら「自己」とは歴史すら生み出す「主体」でもあるからである。では、このような現代の重荷を脱ぎ捨てるにはどうすればよいのか。

この際障害となるのが専門家による「客観的基準」を価値あるものとする思い込みである。それが時として「生命力」のない知識技能の押しつけであり、我々を死に至らしめるものになりうるということを考えようもしない。専門知識なるものが、学校的手さばきで、多様性をけちな小市民的の賢しさで結合しようとするものではなかろうかという疑念を持たない。

【5】学校的「生命力」からの脱却

しかし、我々に必要とされているものは、これからの解放である。この狭く学校的な解釈の克服・転倒こそ我々の仕事である。我々の任務は、益々多くの情動に発言させること、物事に学校外の益々多くの視線を向けることである。学問の問題は学問の基盤の上では認識されるわけがないと痛感すること。「生」の光学のもとで生きること。生を耐えやすくする装置としての「真理」ではなくて、「生を肯定」する「虚構」から出発すること。これらが我々に求められているのである。その時世界はせせこましい解釈を離れて無限となり、過剰となる。無限の解釈、無限の可能性は我々を戦慄せしめる。戦慄せしめ得ない知識が果して知識と言えようか。

操作的思考が無制約的に君臨するとき、イリュージョンは破壊される。なぜなら「出来事」を可能ならしめる唯一のもの、独特の「雰囲気」を剥いでしまうからである。それは普遍性、論理性、客観性という名のステレオタイプに還元される。「出来事」を機械論的、力学的基準で選び取り、それ以外のものを排除して、整える「科学主義」は、Lebensweltを抽象化したがる技術官僚主義的「計画」の発想に適合する。（例えば、「危機管理」の大合唱や行政改革の断行の主張は、社会の各メンバーに官僚的習慣を内化することを迫っている。）それは、一義的因果関係のみを重視し、多義性を無視し、物事の持つシンボル性を無視する＝つまり現実を無視するということを増幅し、そのような様式を個々の体験の隅々まで行き渡らせる。

操作的思考は、それが誠意に満ちて実行されたものであれ、過度に実践されれば恐るべきものになることは、今や周知のことである。それは生命あるものを根こそぎにし、衰弱させ、滅ぼすのである。実験的精神は創造的「生命力」のすべてを扱い得るものではないのだ。むしろ、それは味気ない詮索となって、創造的能力を抑圧する事態も招いている。生命あるものを分析し、解剖し、解体すれば、それは澁刺たる力はおろか、その生命を取り巻く雰囲気をはぎ取られ、生きることをやめ、生命は病気の様相を呈するに至る。このように実験的精神は生活を貧弱化し、すべての「出来事」を「学問的に」認識するという小市民的正義を振りかざす。「出来事」は徹底的に知識技能にまで解体され、ついには滅

ばされるに至る。かくて、生き生きした「出来事」は近視眼的な「役に立つ」ガラクタ知識に生き埋めにされる。「遠くのもの」に共鳴する能力が衰弱しているために、不問に付した方が生命を保てる物事にさえ、無数の微細な詮索を加える。強力な幻想によって支配される生命の方が、知識によって支配される生命よりも優れていることには思い及びもしない。このようなせせこましい「知識欲」を「好奇心」と言い張り、「批判」という名の組織的拷問は、すべてをQ&Aに還元し、夥しいインタビューの厚かましい愚問に変換する。通俗的自由主義が操作的思考と結合し支配権を確立する。現代とは学問つまり技術的、操作的思考が謳歌される時代である。「生涯学習」の名において教育が生涯を支配することを当然と思うようになる時代である。

つまり、人間らしく成熟することは労働市場にとって不必要であり、せせこましい生産や消費にうつつを抜かすままにしておくには邪魔になる。彼らを未熟なままに置いておくこと、それは絶えず調教されることを当然と思う人間を大量に作り出すことである。これが「生涯学習」と呼ばれる。学問的にはモラトリアムの永遠化と名づけられ合法化される。

【6】学校的一元化の衰弱に乘じ、偶然的な個々の「体験」を衰弱させる「生涯学習」

現代では「情報」（諸断片）の間に連関をつけようとする文脈は学校で身につけるものとされる。教師の流儀通りの仕事の「方法」やコツを身につけ、学校の寸法に合わせたやり方は、すぐに板につく。こうして育てられ、すでに一仕事をやり遂げた若手研究者が尊大に社会に向かって説教する。フッサー流の「還元」や「志向性」なる概念を振り回し、「対象を単なる準拠点と見做し」、「身体をもって」「主体」の再構成を図ることを標榜する。しかし生活から切り離された学問工場で仕込まれた専門家には、雇用主（国家など）や監督者の特殊用語を使う以外の生きる道はない。国民はすべて学校教育を受けている。大衆と学校的文化を共有する学問が益々大衆化しないはずがあるか。専門家の研究意欲は大衆的意欲と何等変わるものではなく、学者然として落ち着き、振舞い、小さな専門領域で大衆の好む感情を解放するためにいろいろと工夫をすることに何の疑問も持たない。こうして「現実」は専門的な操作的思考の支配によって干からびる。個々人は、この思考法の帝国主義的支配の網の目をくぐって、細々と作り上げてきた身についた言葉でもう一度語り直そうとするが、小市民的センチメンタリズムの「美談好み」の文脈がマスコミによって大量に放出されるため、それも不可能となる。

ここに説経師が現れる。彼はいわく。今までの「行動」への考察は、生産活動や政治活動や環境への適応する生物にモデルを取ってきた。だから①身体性、②能動性、③受苦という三つの視点から「行動」を見なければならぬこと。この三者から見れば、単線的行動が如何に抽象的なものであるということが分かるという。身体あるがゆえに、受苦的であり、それが能動的営為のために引き起こされたものであろうとも受苦である。それこそパッションの原義であるという。これが彼をして実践を次のように定義させる。「実践とは各人が身をもって選択し、決断することを通して、隠された現実の諸相を引き出すことである」と。結構な説教ではないか。

こうして、個々の生きる「体験」が「生涯学習」の名をもってかすめとられる概念装置が提供される。「実践」、「選択」、「決断」、「パッション」など。「臨床知」によって教

育され、治療されつつ、我々は「生涯学習」という蜘蛛の巣に絡め取られ、「自己」を衰弱化していく。

〈参考文献〉

E. Grassi : Kunst und Mytos, 1957

榎本久彦訳1973 (法政大学出版局)

H. V. Hofmanstahl, 「チャンドス卿の手紙」1902

P. L. Berger & T. Luchmann : The Social Construction of Reality 1966

A. Cohen : Two-Dimensional Man, 1974

原野利彦 : 転換期の教育1993 (近代文芸社)